

どうも資本主義も末期的になってきたという感じがします。

最近、NEMという仮想通貨がオンラインで抜き取られた、つまり盗まれたという事件がありました。この仮想通貨がどういうものなのか、ピンとくる人はあまりいないのではないかと、「そういうものがあるらしい」という以上に実感をもってわかる人のほうが珍しいのじゃないかという気がします。NEMは1億や2億ではなく、580億くらい抜き取られたといいます。こんなものを買っているやつがこんなにいるのか！と、むしろそっちのほうが驚きです。

そういうこともふくめて、もう一度、資本主義って何なのか、いまの経済って何なのか、それから農業ってどういう経済なのかということを考えていきたいと思えます。

地域内交換経済について

「労働」としての農業のはじまり

言うまでもないことですけれど、農業は資本主義が成立する以前から、ずっと昔からあったと言ってもよい産業です。ただし、農業をひとつの「労働」としてとらえるという発想はそん

なに古くないんじゃないかという気がします。

というのは労働という言葉が使われるようになっていくのは、労働というものが独立したのになつていく、つまり生活とか地域とか文化とか、そういうものとは違うものとして労働が位置づけられていく、そのことによって労働が成立したと言ってもよいわけです。昔の人たちからすれば、普通の生活のなかに労働があるし、地域の暮らしのなかに労働がある。労働というのはいろんなところに埋め込まれたものだったのだろうと思うのです。

僕のいる群馬県上野村では、フキノトウがでてくると、寒いんだけどもちよつと春になつてきたという感じ です。その後は次々に春の様相を呈しはじめる。そうすると村の人たちみんな、山菜を採ったり、それを加工して食べたりはじめます。これ、労働をしているのかというと、たぶん労働だと思つてやっている人はほとんどいない。労働と言つてしまえば労働なのでしょうけど。ただ春の生活、春の営みをしている、それだけのことといえますか。

おそらくかつては農業も、そんな感じが強かつたのでしよう。もつとも米などは日々の営みというよりも納税する作物をつくっているという感じが出てくるのでしようけれども、それ以外のものについていえば、労働をするというようなものではなかつた。むしろ労働としてものごとをとらえるようになったということ自体がひとつの転換だったのだろうという感じがしてきます。

伝統農業にあった三つの「流通」

伝統的な農業には、三つの流通がありました。ひとつは自家消費用の流通です。簡単に言えば、自分でつくって自分で食べるというものです。これもひとつの流通形態に変わりない。ふたつ目は地域内の流通、地域内交換経済です。

三つ目が地域外への流通です。これは、古くは納税を通しておこなわれました。つまり米が年貢として取られていく。それが結果としては全国的な大規模流通をしていく。ひとつにそういうものがありました。もうひとつは、都市が形成されてくると都市への流通がはじまっていく。わかりやすく言うと、全員が農村で農業をしながら暮らしているならば、必要なものはみんな自分たちでつくっているわけですから、何も流通しないわけです。ところが、北九州、それから奈良とか京都、ああいったところに都市が形成されてくると、食糧を生産しない人たちが発生してくる。そこに農産物を提供するという流通がはじまっていく。その場合には近郊農業と都市の関係で流通が起きてくるのです。

複合経済

いまの時代を考えると非常に重要な経済学者として、カール・ポランニーという人がいま

す。僕の若い頃、経済学というتماずカール・マルクスという名ができました。マルクスの経済学はいまでもけっこう有効なものをもっていて、決して軽視してはいけないと思うのですけど、これからはポランニーがますます重要になっていくのだろうという気がしています。1964年まで生きていた比較的最近の人で、ウィーン出身のハンガリー人です。

彼が言っていたのは、経済というのは絶えず複合経済として成立するということでした。たとえばマルクスの経済学だと、資本主義になっていくと経済はすべて資本主義化されていくというとらえ方をしていたのだけれど、ポランニーだとむしろそうではなくて、伝統的なものも残るし、資本主義とは言えないような経済というか、そういうものも残りながらひとつの複合経済として実際の経済は成立するということなのです。

これはそのとおりであって、たとえば東京のような街のなかでも個人商店というのがある。個人商店がやっているのは資本主義的な経営などではないわけで、仕入れてきて少し利ざやを乗っけて売るといふ、ただそれだけのことです。このかたちは、昔のたとえば仲買の商とかそういう人たちがやっていたやり方と基本的に変わらない。ですから資本主義とはいいがたい。けど同じ小売業でも、スーパーマーケットとかコンビニエンスストアとかは資本主義的な小売業です。形態は非常に似ていても資本主義的なものと資本主義とは違うもの、その両方があると言っているのです。

それから東京でも職人的な人たちがまだぼつぼつ残っています。そういう人たちは自分で注文を受けて自分でつくるということをやっているわけで、やはり資本主義的な経営をしているわけではない。昔ながらの職人のやり方みたいなものの延長線上にある。資本主義の影響を受けはするのだけれども、自分自身が資本主義的な経営をする資本家であるわけではない。そういう人たちもちゃんと残っていく。

農業もまた資本主義以前からあった仕事で、それが今日になってもいろんなかたちで残っているといつてよい。

だから資本主義になってくると資本主義的な経済が主軸になって全体を動かすという時代には移っていくけれど、すべてが資本主義化されるわけではありません。むしろ現実には複合経済というかたちをとるといふことなのです（*1）。

共同体に埋め込まれた交換

ポランニーがよくみていたことのひとつは、地域内交換経済というものがどういうかたちでおこなわれているかということだ。古い経済学だと、もともとは物々交換のあたりで等価交換、つまり同じ価値に基づいて交換がおこなわれていたと言われました。そして、いつも物々交換をするのは不便だから、お金を介在させて等価交換をするようになった。そういう方向で

経済は発展していくのだと。

でもポランニーはいろんなところを調べて、実際にはそんなふうにはなっていないと言ったのです。地域内交換経済というのは共同体の慣習にしたがっている。だから等価交換なんていうものは成立していないのだと。

実際にそれで、等価交換ってじつはものすごくややこしい。たとえば、僕がハクサイをつくり、隣の人がダイコンをつくったとします。「じゃ、交換しましょう」といった場合、どういう交換にしたら等価交換になるのか。価格をつけちゃえば、仮にダイコンが1本100円でハクサイも1個100円だと、1個ずつ交換すれば等価交換だ、ということになりますけど、地域内交換に価格などつけるはずがない。そうすると一体どういう交換したら等価になるのか、非常にわかりにくい。実際にはそんなやり方をしていないわけです。なんとなく自分の家

(*1)「資本制社会とは、資本主義的生産様式を主要な生産様式として組織化された社会を示すのであって、全資本主義の社会があるのではない」①『労働過程論ノート』(123頁)

「旧社会を支えた様々なものは、支配的な地位から滑り落ちて、補助的な役割に回って生き残る」⑥

『自然と人間の哲学』(90頁)

「今日の村人と森の間には二種類の「経済」がつくられている。……「暮らしの経済」と……市場経済」

⑩『森にかよう道』(64頁)

でダイコンがたくさんとれて、隣の家は不作だったから「ちょっとうちのを隣にあげようか」とか、それだけの話です。もらったほうも別にすぐにお返しをするわけでもなくて、機会があつたときに、「こんどは隣がどうもハクサイが不作だから、この間のお返しにもつていこうか」とか、そんな感じでやっっているだけの話です。

つまり地域内経済というのは、共同体のもっている「なんとはなくてできてくるルール」のよ
うなものにしたがっている。

そういう「なんとなくのルール」のなかには、ときにはかなり厳格なものもあります。いまおこなわれているものとしては、お葬式のお香典。別に文章にはなっていないけれども、自分の家はいくらもつていくのかというルールがなんとなくある。これがややこしくて、僕などは依然として上野村のルールがよくわからない。というのは集落ごとに違うからです。

僕の場合は上野村では親戚づきあいは存在しないので、すべて近所づきあいの金額になるのだけれども、それも僕のいまいる集落では3000円、前にいたところでは1万円と決まっています。これは勝手に乱してしまうとよくないので、お葬式に行くときには、隣の家のおじさんがそういうことにものすごく詳しいので、僕はいくら包んでいったらいいのか、いちいち聞きに行きます。うちの村の長老に、何年ぐらい住んでいたらそういういろんなルールを全部わかるようになるんだと誰かが聞いたら、「うーん、だいたい死ぬ頃だな」と(笑)。それぐらい

村のルールはややこしい。

お香典返しもかなりルールがあります。うちのほうも最近では東京方式（半返し）になったところが多くなりましたが、もともとは、香典の金額に関係なくその家に用意されていて、それを帰るときにお渡しするというやり方で、昔は米5キログラムでした。というのは上野村は米がとれないので。ですから、たとえば腰が悪くて動けない人の分まで頼まれてもっていくと、帰りは重くてしょうがないというような、そういうお香典返しの仕方をしていたのです。最近、式場が絡んでくるのがでて少し変わってきた感じはありますが、まだ7〜8割は昔式で、その場で渡すというルールになっています。このへんも地域によって違ってきます。

お香典というのはお金と決まっています。お香典とは別にその人が好きだったお饅頭とかをもっていくのは構わないけども、饅頭だけをもっていくわけにはいかない。江戸時代ぐらゐからそういうルールがあるようです。

「ダイコンが豊作だったから隣にもっていこうか」式の交換にしても、香典と香典返しのよくなかなりはつきりしたルールにしても、どちらも、地域内流通というのは、共同体がもっている「なんとはないルール」、自分たちの地域社会のなかに埋め込まれた交換ルールにしたがっているのであって、等価の価値交換などという流通ではないということなのです（*2）。

諸要素が一体的に展開した

それに対して、地域外との流通は、やはり価値を定めて流通させます。たとえばダイコンは1本100円という価値を定めて流通させる。ただし、地域内流通の仕組みがしつかり残っている時代は、地域外の流通も、共同体の決まりみたいなものにかなり制約されていました。買に来る仲買人とか商人たちもその地域の共同体のルールというものを頭に入れながら買っていくし、売る側も共同体のルールを考えながら売っていく。たとえば、自分の家はダイコンが非常に豊作だったとします。豊作だから、去年の半値で売っても採算がとれる。でも、そんなことをしたら他の家が困ってしまうわけです。その半値が相場になってしまいますから。だから共同体の仕組みを考えながらなんとか価格設定をしていく。商人たちもそういうことを考えながら買いつけをしていく。完全に野放しの流通というのは、じつは伝統的にはほとんどなかったということです。

それが資本主義になってくると、共同体が解体されて、共同体的ルールが弱体化していく。そのことによって、価格に基づく流通が手放しでおこなわれるようになっていく。そういう歴史なのだと言っています。

つまりポランニーが言っていることは、もともと経済活動というのは独立した営みではない